

演題 関西学院陸上競技部の変遷 —大正・昭和・平成—

講師 清水 道大

司会 井上 琢智

井上 それでは本年度、秋の二回目の研究月例会を開催したいと思います。今回は、春学期のサッカー部に続きまして陸上競技部の清水道大さんからお話を伺いたいと思います。今回の企画の意義の一つですが、『関西学院百年史』では書くことのできなかった、各クラブ・部の歴史を『関西学院事典』(一一一周年記念として出版)では収録できませんでした。一・二五周年記念として企画されている『関西学院事典』の改訂版につながるようなお話をこの研究会でお聞きできたらと、というのが編集室の想いでした。

清水さん自身は八尾高等学校から関学の史学科に入学され、そして陸上競技部に入られた後、マネージャー等をさ

れてきました。その時代は、第四期の黄金時代の幕開けの時で、それが今日に繋がっている訳です。その後、広告代理店で勤務をされた後OB会であります「月見ヶ丘クラブ」の幹事長を務められ、部の経済的支援、精神的支援をずっと支えて来ていただきました。とりわけ一九八八(昭和六三)年に『陸上競技部七〇年史』の刊行にあたっては編集長をお務めいただき、資料の提供をはじめ多くの仕事をしていたいただきました。私も多少お手伝いしましたけれども、清水さんがおられなければ、この年史はこのような形で刊行する事は難しかっただろうと思っております。そのような清水さんのお考えなどを聞かせていただき、関学の

陸上がどういう精神を以て、そしてどのような業績で得て、今日に至っているかということをお話していただければと思っております。それでは、よろしくお願いいたします。

清水 私は一九六〇（昭和三五）年に文学部史学科を卒業しました清水でございます。一昨年亡くなられた永島福太郎先生のゼミ生でした。現役時代は何も部に貢献できない二流選手でしたが、二年生の終わりごろ当時の三年、四年のマネージャーから仕事を手伝って欲しいという話が来りました。陸上競技部に入部した限り四年間の間に何とか部にご貢献したいと思っていましたので、引き受けたのですが、当時のマネージャーは、現在のように誰もが銀行振り込みができる時代ではありませんので、年会費を先輩のところへ頂きに行くという仕事が一番の仕事でありました。もう一つは、選手勧誘も大事な仕事でありました。マネージャーをさせていたただいたお陰で、そのころは、創部当時の諸先輩がお元気でおられましたので、何人かのお方とお話をさせていたただいたことが、今日こういう話をする事になったのではないかと思っております。

マネージャー時代に、創部当時の大選手 渡辺文吉さんという私にとっては大恩人にお会いできました。当時、朝

日新聞の運動部長から山陰放送の大阪支社長をしていただきました。年会費をお願いにあがると機嫌よく出していただける先輩もおられるし、何度行っても出してもらえない先輩もおられましたが、その度に帰りぎわ朝日新聞ビルにあつた山陰放送の大阪支社へ寄せていただいて、その報告をいろいろしていました。その内卒業間際になって就職するなら君はマスコミ関係が向いている、新聞社や放送局よりも広告会社が今後伸びるのだからと広告代理店を紹介していただき、私にとっては大恩人との出会いでした。

そういう訳で、四八年間広告の仕事に携わり、その間に各企業の年史や社史などの企画や編集を見聞きしておりました。一九七四（昭和四九）年にはじめて陸上競技部のクラブ会報を出すということになり、会報の編集を手伝ったことが一九八〇（昭和五五）年からOB会の幹事長を仰せつかることになり、その八年後、一九八八（昭和六三）年に創部七〇周年の祝賀会を開催し、同時に『陸上競技部七〇年史』の編集長を引き受け、発刊して幹事長を引かせていただきました。幹事長時代は大学紛争の後で選手層が薄く、関西インカレでは一部から二部に落ちたり、一部に上がってはまた落ちたりする低迷時代の幹事長でございますので、現在活躍してくれている選手をみますと非常に

うれしく思うわけでございます。

これからお話をさせていただきますが、陸上競技部の年表に沿ってお話させていただきたいと思えます。この年表は『七〇年史』を編纂する時に、今日出席していただいている学院職員の北井敏雄総監督が非常に熱心に作ってくれたものであり、私はアレンジしただけでございます。この北井君の協力が無ければ『七〇年史』は発刊することが出来なかつたと思っております。

I

それではこの年表で創部一年前から始めさせていただきます。創部一年前一九一七（大正六）年に宮本常蔵さんが第三回極東オリンピックに出場しておられますが、この人は関西学院スポーツ史上初めて公式の国際大会に出場された方でございます。前年の一九一六（大正五）年豊中で行なわれた京阪神都市対抗競技会の円盤投において、大会新記録で優勝し、日本代表として出場されました。お父さんがドイツ人、お母さんが日本人、身長が五尺八寸五分であつたようですが、この大会で六位に入賞されています。これも関西学院で初めて国際試合の入賞であるかと思えます。この大会以降、陸上競技熱は全国の学生間に非常に高まっ

てきて、次第に学生の競技連合が組織される方向に向つたということです。これから二年後に、関東学生陸上競技連盟が結成されています。

陸上競技部の大正時代といえ、一九一八（大正七）年から一九二六（大正一五）年までの足かけ九年で、国内では一九一八（大正七）年の米騒動や一九二三（大正一二）年の関東大震災などがあつた時代ですが、国の体制はアメリカ・イギリスと肩を並べる世界三大強国を目指して、軍国主義の道をひた走り始めた時代であつたと思えます。

一九一八（大正七）年に陸上競技部は独立して、正式に運動部に加入しました。部員二二名、それぞれ特色を持つた二年生と一年生の若々しいチームであつたようです。部長は小寺敬一先生、主将伊達宗敏さん、マネージャー深山武夫さんでした。小寺敬一先生は昭和三〇年代の初めごろの陸上競技部の部長をしていた小寺武四郎先生の叔父さまに当たる方です。スポーツ万能の先生で、一九一五（大正四）年に行なわれました大阪毎日新聞社主催の第二回日本オリンピック大会に出場されています。創部当時と大正末期から戦後にかけて約二五年の長きにわたり、陸上競技部部長として部を見守つていただき、お世話になつた先生です。

このころまでは学校での競技は運動会というかたちで行なわれていましたが、極東オリンピックに学生が参加して以来、だんだんすべてが記録を目標とする近代的な陸上競技に変わっていった時代であります。当時の大きな大会は大日本体育協会主催の日本陸上競技選手権大会や日本・フィリピン・支那の三国で二年おきに開催された極東オリンピックが大きな目標であり、大阪毎日新聞主催の日本オリンピック大会や東西の一流選手を選抜して行なわれた朝日新聞主催の東西対抗技に出場することに重点が置かれていたようです。また各大学、とくに東京帝大と京都帝大が全国の大学を招待し運動会を行い、招待一六〇〇mリレーは日本一を決める今のインターカレッジと同じ価値があり、このリレーに大きな関心を持たれていた時期でありました。

創部して夏の合宿を甲子園の枝川の空き家を借りて泊まり、鳴尾競技場で練習し第四回日本オリンピックを目標したようです。この大会は極東オリンピックに出場された宮本常蔵さんが、円盤投で優勝しておられます。創部当時の話で先輩が書き残したのですが、陸上競技部はどのような形で生まれたのか、おもしろいエピソードがありますのでご披露したいと思います。

陸上競技部より古く創部されたボート部がありました。原田の森をまっすぐ下に下りていくと敏馬海岸があり、そこに艇庫を持っていたようです。またこの海岸沿いに灘の造り酒屋相手のお茶屋や芸者の検番があつたため、その当時の学生も海岸へ下りてよく遊びに行っていたようです。だんだんボートが老朽化して使えなくなり、また遊びすぎでお金もなくなつて退屈になり、走り出したのが陸上競技部の始まりであると書いておられます。これも創部当時のことですが、学生会の運動部から割当てられた部費は七五〇円です。学生数が八〇〇人程度で運動部の財源は九〇〇〇円だったようです。部費七五〇円は後からできた部としては、たくさん貰つたようです。

一九二二（大正一一）年には、さきほど話しました渡辺文吉さんが、運動部長に推挙された時に一五〇〇円にアップされたようです。これは陸上競技部が全国的に名声を高めた代償として当然と思つていたら、私はご本人から聞いたことがあります。

創部した翌年、一九一九（大正八）年に第四回極東オリンピックがフィリピンのマニラで行なわれる予定でしたが、フィリピンは五月の開催を通告してきたようです。学生中心の選手団でしたので、日本は八月の開催を提案したので

すが、向こうは雨季であるということでも変更はなく、この当時体育界のすべてを仕切っていました大日本体育協会がこの大会のボイコットを決め脱退を発表しました。これに反対したのは学生で東京帝大・東京高師・早稲田大・東京農大などが集まって、組織を結成したのが関東学連の始まりであります。その他に関西在住の各スポーツのOBで組織された日本青年運動クラブの肝いりで日本代表選手をそこから派遣しました。そのときにキャプテンの伊達宗敏さんが代表に選ばれ陸上競技部として初の海外遠征をされており、大会では暑さに負け予選で敗退されていますが、その年の日本選手権で一〇〇m・二〇〇mで優勝し一マイルリレー・半マイルリレーにも優勝され日本一になっておられます。この年は学院の創立三〇周年の年で、一〇月に大運動会が盛大に行なわれました。大勢の観衆が集まり、啓明寮の仮装行列などがあつたようです。

一九二〇（大正九）年は早稲田との対校戦・神戸高商との対校戦が始まった年であります。

この早稲田との対校戦は現在存続する日本最古の対校競技会だと思っています。五月に朝日新聞の後援で行われたのですが後援料は二五〇円、この時の写真を拝見しますと随分立派な優勝旗が朝日新聞から寄贈されています。鳴尾

競技場で一九種目の大がかりな対校戦であつたようです。

前年一九一九（大正八）年に慶応と神戸高商が東西の大学で始めて対校戦を戦っています。慶応が関西の学校と対校戦を行なったということに早稲田も触発され、何とか関西の学校と対校試合をしようと思つていたようですし、また関学もその当時関東では最強であつた早稲田を打倒するという野望に満ちていたようです。ただ内心は学生の数とかスケールから比較にならない強敵とも思つていたようです。早稲田のマネージャー岡本逸平さんが大阪の池田師範の出身で、渡辺文吉さんとも面識があつたようです。その時の関学のマネージャー深山武夫さんは「深山天皇」と呼ばれ、関西学生陸上界の重鎮で辣腕マネージャーでした。対校戦などは勝つても負けるも俺が責任を持つということ、部を統率しておられたようです。その深山さんが早稲田のマネージャーと打合せをされとんとん拍子で話が進んで合意されたようです。

競技は初戦の一〇〇mで一・二・三位に入り六対〇。一位が三点つづいて二点・一点ですから六対〇になり非常に幸先よく点を取り、最終的には予想外の結果で六三対四五というスコアで関西学院が第一回は勝利しました。競技が終わつた後、関西に來られた時は神戸の「三輪」には

宗右衛門町の「いろは」に早稲田の選手を招いてすき焼きパーティーをし、非常に和やかで、両校は大変仲が良かったと諸先輩に聞いています。七月には神戸高商と対校戦を行なっていますが、関学が天下の早稲田を破ったということが新聞に大々的に報道され、当時実力ナンバーワンであった神戸高商が挑戦してきたのです。鳴尾で日本一の王座をかけて戦いました。熱戦を繰り広げ、もつれにもつれ最後の競技の走幅跳とリレーが日没になり、グラウンドの要所要所に枕木を焚いての夜間試合になったようです。しかも高商側がその後の競技に遅延策をとり、ドロンゲームに持ち込もうとする策にでたとみなされ、審判長の春日弘さんが神戸の棄権と判定され、その時点の得点五二対四七で関学の勝利を宣言するという前代未聞の幕切れであったようです。競技の終わったのはかれこれ九時五〇分を過ぎていて、控え室には満天の星がきらめいていたといわれています。この試合で渡辺文吉さんは高障害で、従来の日本記録を一秒二短縮する一六秒四の日本新記録をマークしておられます。毎年継続して行なうことになっていましたが、このような幕切れになったのでその後六年間は空白ができて第二回大会が行なわれたのは、一九二六（大正一五）年になっています。因みに早稲田と慶応が陸上競技で早慶戦を

行なったのは一九二三（大正一二）年からで早慶戦より三年後のことです。

またこの年の一月に駒場の農学部グラウンドで行なわれた東京帝大の招待リレーで、神戸大学の年史の中に、この時痛快な事件が起こったということが書かれています。「二六〇〇mリレーで関学のアンカー伊達宗敏が最後の直線九〇mのところから、慶応応援団の前で慶応の選手を抜き、早稲田の応援団の前で早稲田の選手を、一高の応援団の前で一高の選手を抜いてテープを切り、優勝し満場を沸かせて大活躍をした」と。現在のインターカレッジの全国優勝に劣らぬ評価を受けた時代ですので、その二日後選手たちは列車で神戸駅に帰ってきたのですが、月曜日であったようですが授業をエスケープした学生が四〇〇名ほど神戸駅へ選手を向かえ行き、ホームに着いた選手を胴上げして、「万歳」の声が神戸駅に沸きかえったということです。選手たちは優勝旗を先頭に湊川神社に優勝の報告をし、その後元町通りをパレードしたようです。日本の陸上競技の黎明期は学生主体の大会で、こんなことが許される時代がありました。

一九二一（大正一〇）年に上海で行なわれた第五回極東オリンピックに渡辺文吉さんが出場され、ハードル二種目

で銀メダルを獲得しておられます。これは関西学院スポーツ史上、国際試合で獲得した初のメダルです。

渡辺さんは明治三二年徳島県麻植郡川島町でお生まれになり、一才のとき家を挙げて大阪に移り住み、大阪商業に入学してから野球をしておられたようです。大正三年には、美津濃が主催した関西学生連合野球大会に大阪商業の遊撃手として出場し優勝されています。関学に入ってから野球をやりたいと思っておられたようですが、原田の森に隣接する神戸高商が当時実力日本ナンバーワンで、陸上競技界の本陣でしたのでそれに刺激され入部されたようです。極東オリンピックから帰られてから秋の関学の運動会でアキレス腱を切断され競技生活を終えられるのですが、その後も学生陸上競技界に大変貢献されています。とくにこの年の一〇月関西学連が組織されるわけですが、このとき深山さんと一緒に参加され、神戸高商、同志社大、関西大、大阪医大と話し合い、関西学生陸上競技連盟を結成されています。一二月に記念すべき第一回関西インカレが開催され、神戸高商が優勝しています。

一九二二（大正一一）年は競技部一期生が卒業されたのOB会「月見ヶ丘クラブ」が創設されています。

一九二三（大正一二）年は大阪で行なわれた第六回極東

選手権（この大会から名称変更）に一〇種競技で渡部武寿さん、五種競技で正垣通三さん、走高跳に田中有道さん、棒高跳に中沢米太郎さんの四名が出場しています。この大会の棒高跳で中沢さんが優勝し、国際大会で関学初の金メダルを獲得しておられます。五種競技に出場された正垣さんは戦後すぐ陸上競技部の黄金時代に監督をしていただき、「兵庫陸上競技協会」の会長、「日本陸上競技連盟」の副会長、「兵庫体育協会」の名譽会長などを歴任され、スポーツ界に貢献され大変お世話になった方です。九月には未曾有の関東大震災があり、早関戦は中止になっています。一月大阪市立で行なわれた第二回全国選手権で一〇種競技で渡部さんがそして八〇〇mリレーも優勝しています。

一九二四（大正一三）年は九月大阪市立で行なわれた第四回関西インカレで跳躍の榎原賢太郎さん、投擲の寺田辰次郎さん、渡部武寿さんの活躍で、初めて念願の総合優勝をしています。一〇月明治神宮競技場（現在の国立競技場）で行なわれた第一回明治神宮大会の鉄槌投（ハンマー投）で寺田辰次郎さんが優勝されています。寺田さんは日本最初のトリプルターンをしてハンマーを投げられ、日本新記録を樹立された方です。原田の森のグラウンドは一周二〇〇mの小さなグラウンドでしたので、あまりにも速く

へ投げられるので、隣の民家の二階にハンマーが突き破ったという事件があったようです。この寺田さんはいたいへん豪傑な方で、原田の森の学院の正面通りに「アカデミーバー」というバーがあつて、練習終了後毎晩ここで洋酒を飲んでおられ、そのころ岡本に住んでおられた作家の谷崎潤一郎さんがいつもここに顔を出し、二人並んでよく飲んでおられたようです。東京から日本記録を作つて帰つた夜、このバーで飲み、酔つ払つて通りの立て看板を全部集めて学院の正面に立て掛けて翌日大騒ぎになつたことがあつたようです。四年の課程を七年かかかつて卒業され、その後徴兵されるまで部の監督を務められ、戦後復員されてから関学の保健体育の先生をしておられます。その主任をされていた昭和二九年に突然心臓発作で帰らぬ人となられました。陸上競技部史の中では欠くことのできない人です。

一九二五（大正一四）年の五月マニラで行なわれた極東選手権には高障害で前川博さん、棒高跳で赤坂正一さん、五種競技で渡部武寿さんの三名が出場されており、この頃は毎回極東選手権に日本代表をおくり黄金時代が続いたという事です。その年の秋に、昭和の初めからの低迷期が続くようになった大事件が起つています。

それは実家が新聞の販売店をされていた大谷茂樹さんの

提案で、神戸の新興地で興行していた喜劇の一座曾我廼家五九郎劇団と須磨の大手グラウンドで交歓野球試合を行なっていました。しかも普通の日に授業をサボつてほぼ全員が参加し、試合終了後芝居を見て帰つたようです。誰が密告したのでしょうか。学校当局が知る前に翌日の新聞にでかか載つてしまい、教授会の受けがいつぱんに悪くなり、卒業できたのは二名だけで、その上大正一五年の入部者が一名になり、その後の昭和の初期からの長い低迷につながる原因になつたわけです。

一九二六（大正一五）年の第一三回日本選手権の走高跳で、関学中学部の木村一夫さんが一m八三を跳び優勝されています。木村さんは日本人初めてのオリンピック金メダリスト早稲田の織田幹雄さんが日本一の選手に育てるという事で勧誘され、一九二八（昭和三）年早稲田に転校されています。アムステルダムとロスアンゼルス両オリンピックに日本代表になり、アムステルダム大会では六位に入賞されています。当時の先輩の手記を読みますと、部員は泣きの涙で木村さんを送り出したということです。この年の一月に中断していた神戸高商との定期戦を六年ぶりに行い四五対二三で勝っています。

大戦に連勝し、ようやく低迷期を脱し復活のきざしがみられるようになりました。この年に兵庫陸上競技協会が設立され、その時に山本一夫さんが初代の理事長になっておられます。これを機に第一回兵庫選手権が新装なった神戸市民競技場で行なわれ、秋には近畿選手権も行なわれ、地方の選手権がこのころから開催されるようになりました。学院では校歌「空の翼」が発表され、一月には運動部の覇業交換が始めて実施されています。

一九三四（昭和九）年は後ほど説明しますが前田巖さんと戸田一雄さんという有望な新人が入学され、次第に陣容が整えられてきた年です。一九三五（昭和一〇）年は第一回兵庫インカレが始まった年ですが、一七五点の高得点を取って優勝し、その後四二連勝をしています。この年は第二期黄金時代の幕開けの年になりました。一九三六（昭和一一）年はベルリンオリンピックが開催された年ですが、このころの日本選手団は学生が中心で、宿敵早稲田は八名の選手を代表として送っており、低迷していた関学との差が縮まらなかったわけです。関西では京都大が一九二六（大正一五）年から一九三〇（昭和五）年まで総合で五連覇を達成し、その後関西大が一九三一（昭和六）年から一九三八（昭和一三）年まで八連覇しています。関学は長

い低迷期が続きましたが、黄金期を迎えても関西大などと比べて学生数や部員数が少なく、総合優勝につながらなかったようです。陸上競技は現在二三種目が行なわれていますが、当時でも、我々の時代でも関西大は各種目にフルエントリーをしてきましたが、関学は半数程度しかエントリーがでせず、関西インカレにおいても種目別の優勝数は多くても総合では苦戦をしていました。この年、オール三重と対抗戦が行なわれています。これは有望な選手が入学してきたころから、三重県伊勢の神宮皇字館のグラウンドを借り、八月末から九月にかけて「大安旅館」で毎年合宿をしていたようです。お伊勢参りの閑散期であった時季なので、女中さんの至れり尽くせりのサービスがあり、この時代の学院の競技部で過ごしたものは誰でもこの伊勢での合宿が待ちどろしく、楽しみにしている部員が多かったようです。この合宿の噂を聞き、東京からも多くの大学がこへ来て合宿をしたと当時の先輩から聞いています。このことがあって三重県の陸上競技協会が設立されたとき、その記念として朝日新聞に後援を頼み、オール三重と対抗戦を行なったということです。関学が四九対三一で勝ち新聞に大きく報道され、大いに話題を呼んだようです。

一九三七（昭和一二）年日中戦争が始まった年ですが、

東京オリンピックの開催が決まっていたので、日米対抗戦を中心に記録的には賑わった年でしたが日中開戦で国内は戦時体制に入り、暗い時代になって行きました。関学陸上競技部はようやく低迷期を脱出し、全日本インカレにも六名の選手が出場し二三・五点を獲得しています。この大会で上位入賞した前田巖さん、戸田一雄さんは日米対抗戦や日米学生交歓競技会またオリンピック選手招待競技会に出場され大活躍をしておられます。

一九三八（昭和一三）年は残念なことに東京オリンピックの開催を返上し、秋に予定されていた日独・日米対抗が中止になって、国際大会は日滿対抗だけになりこの大会に戸田一雄さんが日本代表になり満州へ遠征しています。五月の関西インカレで初めて八種目に優勝し、僅差で関西大に次いで総合二位になって総合優勝を狙えるようになり、翌一九三九（昭和一四）年にはついに関西大の九連覇を阻止し、一二七・二点の高得点を上げ優勝しています。またこの一九三八年の一〇月に東京で行なわれました全日本インカレで、前田巖さんが棒高跳で戸田一雄さんが八〇〇mで優勝され日本チャンピオンになっておられます。東京の空に弦月旗が二本揚がったということです。当時の表彰式はプラスバンドの生演奏で校歌が吹奏され、すべての競技

は中止され、全員起立して部旗に注目して、優勝者の感激は大変なものであったようです。また六月甲子園南で行なわれた近畿選手権の棒高跳で前田巖さんが四m二五の大記録を跳んでおられます。この記録はこの年の世界ランキング一位にランクされています。この一位ですがアメリカが強かったので上位九名がアメリカ、ソ連が一名、あと日本ということで、アメリカ、ソ連に次いでこの記録です。この年の記録としては、ベルリンオリンピックの棒高跳で友情のメダルを分けあつた慶応の大江秀雄さんと早稲田の西田修平さんを越す大記録でありました。

一九三九（昭和一四）年 前田巖さんがユニバーシアードウィーン大会に出場されています。競技は八月の四日間で行なわれる予定でした。二日目まで無事に試合は終了したのですが三日目の棒高跳を控えた夜に突然マネージャーに起こされ「ただいまドイツ駐日大使よりただちにこの場から引き揚げろ」という極秘命令を受けたといわれた。せめてもう一日待てないのかと願ったようですが、事態は急迫して指定された列車に乗るしかなかつたようです。これが第二次世界大戦の始まりであり、戦火を逃れてコペンハーゲン、オスロ、ベルゲンを経て、一〇月末に横浜に到着されています。六月のはじめに出発されていますので、

五ヶ月にわたる長い遠征であったようです。前田さんは手記に長い期間をかけての遠征も、目的を達成することなく終わったのは忘れることのできない思い出であると書かれています。

戸田さんはこのユニバーシアード派遣予選会の八〇〇mでこの年の日本ランキング一位になる好記録で優勝されていますが、残念ながら代表選手にはなれませんでした。この一位の記録（一分五七秒六）は学院記録として一九七七（昭和五二）年まで三八年間君臨した大記録です。

先に話しましたが、五月に行なわれた関西インカレは、関西大の九連覇を阻み、一五年ぶりの総合優勝をしています。この時も八種目の優勝をしています。戸田さんは四〇〇m、八〇〇m、一五〇〇mの三種目に優勝し、超人的な活躍をされ優勝に貢献されています。この大会は甲子園南運動場で行なわれましたが、表彰式後阪神電車の甲子園駅まで校歌を歌いながらパレードをしたようです。この時代もこんなことが許されるほど学生スポーツはもてはやされていた時代でした。第二期黄金時代の頂点の年は「関西学院創立五〇周年」の年でした。

一九四〇（昭和一五）年は「紀元二六〇〇年」の年で「日独伊三国同盟」が結ばれ、戦争へ突き進んでいった年です

が、学院も初代学長のベーツ先生が戦雲に追われ帰国されました。この年は第二期黄金時代を築いた優秀な選手卒業により、六月の関西インカレは三位になっています。

一九四一（昭和一六）年は戦争に突入し、文部省の禁令により日本インカレは中止となり、関東学生、関西学生、東海学生など地方の大会のみの開催になってしまいました。五月の対大阪商大戦は大勝利、一九三一（昭和六）年から行なわれていたこの大会は関学の九勝二敗となり、この年が最後の大会となりました。七月に早関戦は行なわれませんが、台風のため列車が動かなくなり、大阪から東京まで二日ばかりで行ったようで、翌日東京高師のグラウンドを借りて定期戦は行なわれました。朝から両大学の選手が協力し合って四〇〇mトラックのコース引きをはじめ、ハードルの配置や跳躍のための砂場掘りなどして、試合に臨んだようです。このように早稲田と関学の選手はこの時代も仲良く、定期戦をやり遂げるため協力しあって試合をしています。

この試合に活躍された平田重信先生はわれわれの時代の監督さんでした。先生の現役時代は二〇〇mから一五〇〇mまで走られたオランダプレーヤーで、学生東西対校の常連選手でした。一九四三（昭和一八）年卒業され、戦

後はお勤めをされていたのですが、一九五二（昭和二九）

年寺田辰次郎監督の急逝で、当時の大石平太郎学長から大学に帰るよう要請され、大学の保健体育の教員として学院に戻られ、一九五六（昭和三一）年から一九七二（昭和四六）年まで長きに亘って監督をしていただきました。監督時代は先生のお力で第四期黄金時代を築かれ、オリンピックに三名、アジア大会に三名、ユニバーシアードに四名の日本代表選手を送り、日本インカレ優勝者はリレーメンバーを含めると一〇名以上の選手を育てておられます。しかもご本人は東京オリリンピックの短距離コーチ、ユニバーシアード東京・トリノの両大会のコーチとして参加されておられます。退職後武庫川女子大に行かれ、ここでも多くの一流選手を育てておられます。関西学連の副会長やヘッドコーチを歴任され、陸上競技界を引っ張ってこられた先生です。誠に温厚な誠実な先生で毎日選手より先にグラウンドに出ておられ、選手を待っておられた監督さんです。この先生も陸上競技史には欠かせない先生です。

一九四二（昭和一七）年にはスポーツも戦争により大きな影響を受け、スポーツ大会は実施不可能になり、ほとんどの大会は中止となりました。

III

戦後になりますが一九四五（昭和二〇）年学院は復員生徒が続々と帰校し、一〇月には大学の講義が再開されましたが、食糧難や練習する運動場がなくスポーツをする状況ではなかったようです。その中で陸上競技部は復員生徒が多く、翌年春には大学予科生であった優秀な学生が集まり、強力なチームに成長していきました。

一九四六（昭和二一）年日本インカレは復活されませんでした。戦後初のビックゲームであった西京極で行われた第一回国民体育大会（兼日本選手権）の一六〇〇mリレーで優勝し、全国制覇をしています。これ以来一九五二（昭和二七）年ころまで第三期黄金時代が到来するのですが、それは復員生徒が早くからトレーニングに取り組めたこと、比較的恵まれた家庭の学生が多く他校よりスポーツに力を注げるゆとりがあった選手が多かったということ、食糧難のため関東志向の優秀な選手が関西に残ったことのようにです。

一九四七（昭和二二）年五月の第二四回関西インカレで戦後いち早く総合優勝し、二五回、二六回大会とここから三連覇を達成しています。二四回大会には原正義さんが、二五回大会では岡本俊夫さんが一〇〇m、二〇〇m、

四〇〇mの三種目に勝利し、トリブルクラウンを達成されて優勝に貢献されています。七月再開された日本インカレに五名の選手が参加して二八点を獲得しています。このときの入場行進で使う部旗がなく、マネージャーの土井顕さんが自分の布団のシャツに紺色の布切れで三日月の弦月の校章を縫いつけ、ヤリにくくりつけて行進をされたようで、伝統の部旗の紺色と白色が逆であったわけです。

戦後まもなくのころから一九六八（昭和四三）年の大学紛争のころまで、「短距離の関学」といわれ、全国的に注目を浴びていました。とくに関西インカレでは、大学紛争があった前年までの二一回の大会において一〇〇mで半数以上の一二回優勝し、二〇〇mで一三回、四〇〇mで一五回の優勝、四〇〇mリレーで二一回、一六〇〇mリレーにいたっては二一大会中一六回の優勝をし、八割近い勝率でした。とくに一六〇〇mリレーは一九六〇（昭和三五）年から一九六七（昭和四二）年まで八連覇しております。

一九四九（昭和二四）年も隆盛を極めた年です。関西インカレ、西日本インカレとも総合優勝し、この年の学生東西対抗戦に西軍の代表として一〇名の選手を送っています。

この大会に昭和・平成時代数十年にわたりOB会「月見ヶ丘クラブ」の会長、名誉会長を歴任され、クラブを支え、

発展に寄与された中西俊雄さんが西軍代表として出場されています。

一九五〇（昭和二五）年は堀内哲二さんがヤリ投で関西インカレ、西日本インカレ、日本インカレの三大タイトルを獲得され、国体にも優勝されています。この年の学生ランキングのナンバーワンにランクされ、日本ランキングも二位になっています。

一九五一（昭和二六）年の日本インカレの四〇〇mリレーで始めて全国制覇をし、ヤリ投の堀内さんが二連覇をしておられます。このころは日米対抗や日独対校が各地で行なわれ、関学の多くの選手が日本代表で参加して活躍しています。またこの年に残念なことに創部当時から陸上競技部を見守っていた初代部長小寺敬一先生がご逝去されました。

一九五五（昭和三〇）年は五月の関西インカレで四位になり、昭和二〇年代の活躍に比べると、ややさびしい幕開けになりました。翌昭和三十一年の関西インカレは一種目も優勝がなく、三二点しか獲得できず、戦後初の五位に転落しました。このころは部員数が二〇〇〜三〇〇名程度で、総合優勝は百数十名の部員を抱えるところとは、勝負にならなかったというのが実状です。関西インカレは関西大が昭和

二八年から一〇連覇を達成しています。

一九五七（昭和三二）年にインターハイで活躍した有望な選手の入部と平田重信先生の熱心な指導により、低迷から脱するようになってきました。一月武蔵野で行なわれた全日本選抜陸上競技会の二〇〇mで柳恭博君が日本学生新記録を出し、翌年一九五八（昭和三三）年東京で行なわれたアジア大会に日本代表で出場し、四〇〇mリレーで銀メダルを獲得しています。

一九五八（昭和三三）年の日本インカレは、七月に国立競技場において始めてナイターで行なわれたのですが、わずか八名のエントリーで三二点を取り総合四位に入賞しています。しかも二〇〇mで柳君、四〇〇mで上田康君が優勝し、その上四〇〇mリレーも戦後二度目の優勝し三種目優勝をしています。このとき応援に来ていただいた米田満先生は『月見ヶ丘会報』に「私の日記から」と題して「関学アスリートは東上、日本インカレに臨む。関学よく頑張り、団体で早大、日大、中大につき四位、近來の快挙なり。三日間の陸上応援ですっかりこの競技に魅せられる」と投稿していただいています。このあと行なわれた八月の日米対抗戦にも、日本代表として柳恭博、上田康、藤川二郎の三名が出場し活躍をしています。

一九五九（昭和三四）年の日本インカレは前年健闘したので今年こそという意気込みがありました。しかし大会が始まる一週間前の練習中、キャプテンの柳君が理学部の所にあつた二五〇mの小さなトラックのカーブで足を滑らせ捻挫し、当然優勝候補であつた一〇〇m、二〇〇mとも予選落ちし、全員意気上がらず惨敗しています。「常に関学生は品格をもつて戦え（"Noble Stubbornness"）」と教えていただいた部長の小寺武四郎先生やアリナミンを持つて応援に来ていただいた武田薬品の石原猛先輩などはさぞがっかりされたことと思います。しかし傷が癒えたエース柳君を使って、八月に国立で行なわれた日本選手権の四〇〇mリレーで全国制覇し、雪辱を果たしています。この年は学院創立七〇周年の記念の年でした。

一九六〇（昭和三五）年は小寺武四郎先生から久保芳和先生に部長が代わられた年で、またローマオリンピックが開催された年でもあります。蝦名純君が六月の日本インカレの走幅跳で、オリンピック標準記録の七m五〇を跳び、創部以来初めてのオリンピック日本代表になり、ローマ大会に出場しています。大会三日前の朝の練習のとき腰を痛め、本大会の予選の日まで痛みが取れず、残念ながら予選落ちをしています。この年の五月関西インカレの一五〇〇

mで、正木定雄君が初の四連覇を達成しています。これは短距離の関学といわれていた時代です。中距離で一年生からの連覇は快挙でありました。また秋一〇月、早関戦の八〇〇mリレーで、胸の差で早稲田が勝っています。早稲田・関学両チームとも日本新記録を樹立しています。この年は東京オリンピックに出場する田中章君、浅井浄君が入部して、黄金時代が続くわけです。

一九六一（昭和三十六）年五月の関西インカレは八種目に優勝するも、総合優勝は関西大になり、ここでも部員数の差で涙をのんだが、六月の日本インカレでは一年生の三宅克宏君が一〇〇mハードルに優勝し、三二点を獲得し総合四位になり、総合で関西大よりは上位に入賞しています。七月のユニバーシアード・ソフィア大会の予選会に優勝した浅井君、三宅君は八月の本大会に出場しています。このときギリスへ留学中の久保先生がロンドンからフランクフルトへ飛び、マインツ大学で行なわれた日独対抗戦に駆けつけられました。浅井君が一〇〇mで優勝し、異国の地で彼を讀える国旗を見、表彰台に立った彼に、競技部長として感激したと述べられています。

このころから東京オリンピックを目指し、関学にも強化選手に選ばれた一〇名程度のオリンピック候補選手がいて、

短距離では最強の時代でした。学院で練習するよりも各バートの合宿に参加する方が多かったと聞いています。今日参加してくれています小西廉造君もその一人です。またこの時代の早関戦は、当時早稲田は日本インカレで総合優勝もしくは上位入賞を果たしていた強豪で、関学もオリンピック候補選手が多数いました。両大学とも日本記録が狙える選手が揃っており、常にレベルの高い試合をしていたので、試合当日は各新聞社の運動部の記者が取材のため大勢グラウンドに来ていた時代であったようです。このような光景は大学の定期戦では普通見られない光景で、この時代は両大学が密度の濃い、内容の充実した試合を行なっていた証拠でありましょう。

一九六二（昭和三七）年は今日参加してくれています、現在OB会「月見ヶ丘クラブ」の会長の小西廉造君がこの年に入学し、一九六六（昭和四一）年に卒業されていますので、このあと彼の現役時代の話です。バトンタッチをしたいと思います。四〇〇mリレーは普通日本選抜チームが新記録を達成しているのが常ですが、彼は一九六三（昭和三八）年に関学が単独チームで日本新記録を出したときの第二走者です。よろしくお願いします。

IV

小西 清水さんからの話にありました様に、当時の関学の短距離陣は大変充実していきまして、出場枠三名にエントリーされるといったことが一番高いハードルでありました。結果としてエントリーされた三名は当然決勝での上位入賞者となり、十数点を獲得するという時代でありました。

一九六三(昭和三八)年の四〇〇mリレーの関学単独チームで、四〇秒九の日本新記録樹立についてであります。この年は一〇月に山口県で国体がありまして、国体が終わった後、そのまま福岡の八幡製鉄(現・新日鉄)の鞘が谷競技場で短距離合宿が行なわれました。その合宿の最終日に監督の吉岡隆徳先生からヘッドコーチである平田先生に急拠、関学単独チーム(三宅、小西、井口、浅井)と選抜チーム(石川、菅田、富田、蒲田)とのレースが提案され、にわか仕立てのレースとなり、結果は関学チームが四〇秒九(日本新)、選抜チームが四一秒〇でありました。もしこの合宿当初から最終日に関学単独と選抜で競わすということが、全員に衆知徹底していれば、準備に時間がかけられたであろうし、結果として互いにもっと良い結果(記録)が出たのではという感じがしています。私自身は九月に服部競技場で行なわれた全日本インカレ(総合四位)の四一秒五

で二位の日大に大きく差をつけて圧勝したレースの方が感激、興奮した記憶の方が強く残っています。

一九六四(昭和三九)年の東京オリンピックピックを控えての候補、強化選手の合同合宿(一週間〜一〇日間)が毎月のように実施され、関学からは平田先生、浅井、田中、三宅の諸先輩と私(小西)が参加、飯島(早大)、蒲田(東急)、菅田(日大)、石川(浜松西)など、当時の短距離のそうそうたるメンバーと日々、練習で競い合っていた訳であります。これらの合宿生活で印象に残っていますのは、当時陸連からは、強化合宿に際し、通常の食費とは別に一日一人当り、三、〇〇〇円(現在の貨幣価値では約一〇、〇〇〇円)の栄養補給費がプラスされていたとの事で、合宿中は質、量共にボリューム満点の食事でありました。今思えば、このように多額の税金(経費)を使っていた大きなながら、それに応える練習を行なったかと言えば、私個人は反省以外に言葉がみつからないのが本音であります。東京オリンピックには田中、浅井両先輩が出場され、両氏の日頃の努力と強い意志が報われた事は、本当に嬉しい出来事であり、私どもの誇りでもありました。そういう意味では、一番下級生(二年生)であった事を含めて東京オリンピックに対しての取り組みが甘かったと悔えています。

私の四年間（一九六二～一九六五年）の競技生活で印象に残っています事を二、三列挙しますと、①平田先生の熱心さに加えて、久保芳和先生（部長）が殆どどの試合を観戦されていたことでもあります。常にスタンドの何処かでじつとグラウンドを見つめられていた姿は脳裏にはつきり焼きついています。又、四〇〇mリレーで日本新を出した一年後位に、リレーメンバーをご自宅に招待して下さったのですが、あいにく私がぎっくり腰になり、伺えない旨電話を入れました所、「他の三人は自分のゼミ生でよく知っているが、肝心の君が来れないのは残念やなあ」と電話口で残念がって下さった事が印象に残っています。②スポーツ用品メーカーのオニツカ（現・アシックス）の正垣さんの厚意であります。アップシューズ、練習用スパイク、試合用スパイクを提供していただいた御恩は忘れられません。候補選手だけでなく、当時の部員全員に試供品という形で無償提供を続けて下さり、本当に有難いことでありました。③早関戦の中断の真相（一九六五年中断）です。もう時効の話ですが、東京オリンピックの聖火ランナーの最終走者であった坂井義則君（広島、三次高）が平田先生の熱心な勧誘もあり、関学グラウンドでの合宿にも参加し、関学入学間違いなしと我々も思っていました。入試直前

になって早大への進学が判明、それまでの早関戦を通じて築いてきた友好関係に感情面を含めた亀裂が入り、中断やむなしとの結論となりました。

清水 正垣さんは、オニツカの顧問をしておられたのです。今の四〇秒九の日本新記録ですが、一九七六（昭和五二）年に慶応義塾大学が四〇秒八を出すまで十三年間、日本記録の保持者だったわけです。この新記録達成はその年の神戸新聞社の「平和賞」、関西記者クラブの「スポーツ賞」をいただいています。

一九六四（昭和三九）年は東京オリンピックが開催されました。この大会に選手として田中章君と浅井浄君が出場し、短距離コーチとして平田先生が参加されています。前年一一〇mハードルで日本学生新記録を出した田中君はこの年卒業し、六月にオリンピック標準記録の日本新記録を出して代表になりました。その後長く旭化成で競技生活を続け、一九六五（昭和四〇）年にユニバーシアード・ブタペスト大会にも出場しています。浅井君は一九六一（昭和三六）年のユニバーシアード・ソフィア大会、一九六二（昭和三七）年のジャカルタのアジア大会の代表選手の実績とこの年の国体優勝をはじめ、予選会の上位入賞で四〇〇mリレーの日本代表として出場しています。彼は一六七

cm、六〇kgの小柄なスプリンターです。一〇〇m一〇秒五といえ、今では平凡な記録ですが、当時はコークスを敷き詰めたシンダーか赤レンガの粉を固めて造ったアンツーカーのトラックで、現在のようなゴムの乳液を固めたよくはずむタータントラックではなく、雨が降ればインコースなどはどろどろの状態になるグラウンドでの記録です。グラウンドの進化と用具の改良によって、記録はどんどん向上していったと思います。彼も関西インカレの一〇〇mで一年生から四連覇をしています。卒業後プロ野球「阪急ブレーブス」の走塁コーチをして、世界の盗塁王福本豊選手を育てています。先ほど小西君が話された理由により、この年の一月に第四三回の早関戦が行なわれ、この定期戦をもつて一時中断をしています。

一九六六（昭和四一）年の第四三回関西インカレで一七年ぶりの奇跡の総合優勝をしています。その奇跡というのは、一部で出場している加盟校の中でもっとも関西学連への登録数が少なく、一二種目（現在は二三種目）で最大六三人がエントリーできるのですが、わずかに一六名のエントリーで優勝したことです。平田監督が「嬉しかった選手の気迫」と題して『七〇年史』に手記を残しておられますが、「ここ数年来黄金時代を築いた選手が在学していた時代に

おいても、今年こそは総合優勝と念じながらも、部員数の差でもって優勝できなかった。その卒業生の気持ちがこの部員たちの活躍を引き出す要因になり、この年は多種目出場を申しわたした。主将の栗山利貞が専門種目のやり投はもとより三段跳、円盤投に上位入賞した。また星加利樹は二〇〇m、四〇〇m、四〇〇mハードル、一六〇〇mリレーに出場し全種目優勝した。ことに二〇〇m優勝の一五分後に行なわれた四〇〇mハードルに優勝するという超人的な活躍であった」と。

この星加君は一九六七（昭和四二）年ユニバーシアード・東京大会の代表になっています。そしてOB会「月見ヶ丘クラブ」の前会長を務めていただきました。また前年昭和四一年の一月にバンコクで行なわれたアジア大会に佐藤泰章君が出場しています。

一九六八（昭和四三）年大学紛争が激しくなり、部員の中にも紛争に身を投じるものも出たりして、部活動も次第に支障をきたすようになってきました。そして翌年、スポーツ推薦入試が廃止になり長い低迷期を迎えることとなったわけです。とくに一九七一（昭和四六）年には部員全員で一五名になり、創部以来最小のメンバーになっています。その中で増田学君が走幅跳で活躍し、一九七三（昭

和四八)年ユニバーシアード・モスクワ大会の代表になっています。

このころから関西インカレは関学、関大、同志社という伝統校に代わって、新興大学の台頭があり、大阪体育大、京都産業大が二〇数年にわたり総合優勝を独占するようになっていきました。

一九七四(昭和四九)年にOB会報『月見ヶ丘会報』を発刊することになったのですが、その編集を手伝ったことが、後の幹事長を仰せつかることになったと思っています。現役の低迷がつづきOB会費の納入が悪くなり、会の運営が縮小せざるを得ない状態になりつつあったので、なんとかしても現役とOBがキャッチボール(情報交換)し、ツーウェイのコミュニケーションを計ることが急務であると考えていましたので、この編集を引き受けたわけです。現在年二回発刊され、六六号まで続いていることはうれしいことです。この会報で前部長久保先生が「年史を持たないクラブは人間でいうとバックボーン(背骨)が無いにひとしい。ぜひ年史の編纂を」と数回提唱されています。そしてこの『会報』が土台となって創部七〇周年の時の『七〇年史』の上梓につながったと思っています。

幹事長に就任した翌年一九八一(昭和五六)年には関西

インカレで得点一点しか獲得できず二部に転落し、創部六三年目の屈辱をあじわい、その後何年か一部と二部を往復するありさまでしたが、陸上競技部独自のホームカミングデイを開催するとか、種目別学院記録の表彰制度を作るなどして、OB会と現役部員を盛り上げよう考えました。

一九八二(昭和五七)年北井敏雄君に監督をお願いし、井上琢智先生が副部長に就任していただいた同じ年の一九八六(昭和六一)年に北井君は学院職員として学院に戻ってくれまして、選手たちを直接指導していけるようになりました。そして翌一九八七(昭和六二)年に早稲田OBの磯繁雄先生が学院の体育教員として赴任され、コーチとして厳しく指導していただき、とくに早関戦の再開に尽力していただいたことは大変ありがたく思っています。一九八八(昭和六三)年に井上先生が部長になっていただき、この強力なメンバーのお陰で徐々に長い低迷期から脱する方向にむかい、平成時代になって、第五期の黄金時代を迎えることになったわけです。

北井監督の現役時代は一九七六(昭和五一)年からです。この辺からバトンタッチをしたいと思います。現役時代、監督時代、平成の黄金時代の話をしていただきたいので、よろしく願います。

V

北井 一九七五（昭和五〇）年秋に同志社を除く関西私立三大学で対校戦を実施しました。大学紛争後、スポーツ推薦入試がなくなり低迷していた関学、関大、立命の陸上部が協議し、対校戦を行ないました。神戸新聞社に後援してもらい、王子陸上競技場で開催しました。競技終了後は競技場近くの王子神社で三大学の参加者で懇親会を行ない、大会を盛り上げました。翌年から同志社が参加。四大学の応援団がスタンドで応援合戦を行なうという陸上競技の大会としては一風変わったものでした。当時は関西私立四大学体育連盟の学生幹部が開閉式に出席して挨拶を行ない、連携を強化していました。

一九七七（昭和五二）年第四三回兵庫インカレで第一回大会以来の関学の連勝記録が四二でストップしました。私がマネジャーをしていた時のことです。主将をしていた増田さんは走幅跳で関西インカレで連覇した先輩ですが、自分が主将の時に負けるのをさらい、短距離、跳躍、投擲併せて一〇種目近く出場し得点を稼ぎました。

一九七八（昭和五三）年六月旧学生会館にあった部室が焼失しました。私が四年生の時で前日に新入生歓迎コンパを行なったため、部員の多くが荷物を部室においていまし

た。部室が燃えているとの連絡を聞いて大学に行きました。が、丁度陸上部の下で営業をしていた業者の厨房から出火したため、部室は全焼。OB会「月見ヶ丘クラブ」の先輩に連絡をとりました。当時、阪急春日野道でスポーツ店を営んでいた先輩からシューズを、幹事長であった清水先輩の尽力によりスポーツメーカーからジャージ、Tシャツをいただき、迫っていた西日本インカレに出場できました。

一九八一（昭和五六）年、第五八回関西インカレで初の二部落ちを経験しました。私が四年生の時の一年生が四年生になった時です。高等部と一般人試で入学した部員しかおらず、各人の競技レベルも関西インカレで得点できるような状況ではありませんでした。現在、キャリアアセンターに勤務する竹原さんが監督を降りて、清水幹事長の時の主将であったアジア大会代表の柳さんが監督に就任され、OB会をあげて選手強化を図りましたが、選手層が薄く、創部六三年目にして初の二部降格となりました。翌年の第五九回関西インカレでは監督の柳さん、東京五輪に出場したコーチの島崎さんの努力が実り、一年で一部に復帰しました。しかし、その翌年の第六〇回関西インカレでは前年一部に昇格したメンバーを中心に関西インカレを戦いましたが、個人種目やリレー種目で決勝に残ったものの、当

時は六位までが得点対象でしたので、いずれも七、八位となり全く得点できず再び二部落ちしました。同年一月、全日本大学女子駅伝（国際大学女子招待）が大阪で開催され、陸上部の部員以外に合気道部やソフトテニス部らの寄せ集めチームで初参加しました。前任の柳さんから私が監督を引き継いで、監督として初めての全国大会でした。当時はホテルプラザで盛大な「さよならパーティ」が行なわれました。大阪の姉妹都市の海外の大学からも招待（第一回、第一六回）があり、はなやかな大会でした。初参加の時は二三校中一五位の成績でした。翌年も出場することができました。

一九八四（昭和五九）年から種目別学院新記録達成の表彰制度を「月見ヶ丘クラブ」が実施することになりました。これは低迷する部員を活性化するためにOB会が創案したものです。当時は既に試合が行なわれる競技場が全天候型になっていました。かつて日本トップレベルの記録を有した先輩たちの記録を更新できたことは、現役部員にとって非常に励みになりました。この年の明石であった第六一回関西インカレは二部四位となり二年連続で二部にとどまりました。競技終了後のミーティングには私以外OBがおらず、悔しさと寂しさがありました。幸い、一年生で早稲

田大学の受験を失敗し浪人した後に関学に入学してきた学生など関西インカレで活躍できると思われる新入生が数名入部してしまいましたので、来年は是非一部復帰しようとする場が部員に激励しました。そして翌年の昭和六〇年、神戸ユニバーで行なわれた第六二回関西インカレでは、関大と同点で一部復帰を果たすことができました。

一九八六（昭和六一）年四月、私は関西学院職員に採用され、二部に落ちないように陸上部の強化を始めました。当時、鳴尾高校に二年連続で短距離の二〇〇mで全国インターハイで上位入賞した中西義修君という選手がおり、本人や家族が関学を志望しているとの情報を得ました。阪神大震災にて逝去された植松益春先輩と連絡をとりあいながら勧誘活動を行い、文学部の指定校推薦で入学させることができました。低迷していた陸上部の復興の第一歩を踏み出す原動力となった選手です。昭和六二年四月に早稲田大学を卒業後、日本体育大学の大学院で学んでいた磯繁雄さんが体育の教員として赴任されました。私から陸上部のコーチに就任のお願いし、現役指導していただきました。なお、この年の国体成年B二〇〇mに出場した中西君が優勝しました。昭和三九年の浅井さん、田中さん以来二三年ぶりの快挙でした。

さて、私は関学就職後に幹事長の清水さんから『七〇年史』を作成するので手伝ってほしいと依頼を受けました。清水さんが収集されていたデータの整理とその後データの収集、印刷をお願いした東洋紙業さんとの編集・校正作業に約二年をかけ、何とか完成することができました。一九八八（昭和六三）年七月、東洋ホテルにて創部七〇周年式典を実施しましたが、この年史を作成できたことにより、OB会を再び結束することができました。

一九八九（平成二元）年七月、磯先生が架け橋になり、二五年ぶりに中断していた早稲田大学との対校戦が復活しました。当時は復活させることに消極的なOBもいましたが、陸上部を創部された渡辺文吉大先輩が競技力に大きな差があっても、交流を深めることは大切だと賛同していただき実現しました。大会には早稲田・関学から両校約一〇〇名のOBが王子陸上競技場に応援に駆けつけ、旧交を深める場面も見られました。渡辺大先輩は九〇歳を超える年齢にもかかわらず応援に来ていただきました。この成果が認められ、陸上部として初めて私は体育会OBクラブから「辰馬杯」を受けました。

一九九二（平成四）年四月、前年九月に実施されたスポーツ推薦入学で私の後の監督になった内井亮君を含め五

名が商学部、社会学部に合格し入学してきました。静岡で全国インターハイが行なわれており、長野で夏合宿を行なうながら、磯先生と一緒に会場に向き、受験生の勧誘活動をしました。その結果、陸上部が一番多い合格者を出すことができました。前年の一月の関西学生駅伝で二位になり全日本大学選抜の出雲ロードレースの出場権を得ました。また、当時は全日本大学駅伝の関西予選会は実施されていなかったため、そのまま出場権を得て出場することになりました。駅伝チーム強化をするために、磯先生と相談して中国徳山駅伝出場や教度にわたる強化合宿を実施しました。この駅伝への出場により、関学同窓会の島根支部や名古屋支部を活性化する一役を担うことができました。なお、全日本大学駅伝には当時の柘植学長や畑学生部長にもスタート地点まで応援に来ていただきました。この年、小田原であった早関戦では一点差で惜敗しました。当時の早稲田は長距離選手を中心に強化していました。関学は全国トップの競技レベルのチームではありませんでしたが、長距離以外全般に選手を強化していましたので、対校種目別の選手層では勝っていました。

一九九三（平成五）年七月に行なわれた早関戦は事前にOBにそういった状況を説明していましたので、大会が行

なわれた尼崎陸上競技場に多くのOBが応援に駆けつけてくれました。その前で、予想通り勝利しましたので、OBの喜びもひとおでした。すぐにOB会と相談して祝勝会を新阪急ホテルにて実施しました。祝勝会に出席することができないOBからもたくさんお祝いのメッセージをいただきました。

一九九四（平成六）年四月、スポーツ推薦入試が実施されて以降、陸上部は男子を強化していましたが、社会学部のスポーツ推薦入試で一ノ瀬奈美さんという女子選手が奈良高校から入学してきました。彼女は入学後三年間、体重をコントロールできずに苦しみましたが、最終学年の一九九七（平成九）年に、走高跳で自己記録を更新、関学陸上部として日本インカレ女子初の入賞を果たしました。同年ジュニアのレベルではありますが、監督として初めて長距離の渡邊浩二君、一〇種競技の森川栄二君の二人の日本代表を輩出しました。渡邊君は現在も、関西実業団大阪ガスにて競技を続けています。これ以降、ユニバーシアードや世界ジュニア、アジアジュニアに男女合わせて一名が出場しました。

一九九八（平成一〇）年六月、第九回日本学生種目別選手権の四〇〇mで関学が一〜三位を独占しました。現在、

人間福祉学部社会起業学科の教員である林直也先生も三位になりました。その秋の日本インカレの一六〇〇mリレーの優勝候補にあげられましたが、決勝に残ったものの下位入賞と結果を出すことができませんでした。優勝した大喜田洋一郎君は現在日本陸連に勤務しており、陸上部を側面からサポートしてくれています。なお、同年七月、創部八〇周年記念式典をホテルプラザで行ない、同時に『八〇年史』を発刊しました。

一九九九年（平成一一）年六月、長居第一陸上競技場で行なわれた第七六回関西インカレで七度目の総合優勝を達成しました。一九六六（昭和四一）年に総合優勝して以来の出来事です。多くの先輩からは再び優勝することはできないであろうと言われていました。関学会館オープンング前でしたが、特別に祝勝会を実施することができました。OB、現役以外にも体育会各部から多くの来賓が集まり、総合優勝を祝うことができました。また、同大会では周蘭さんが走高跳で優勝し、女子初の関西インカレ優勝選手になりました。

二〇〇〇（平成一二）年七月、関西学院創立一一一年記念行事として、関学が世話人校となり、関西学院大学スポーツセンターで早稲田、慶応義塾、同志社、関学の四大学の

学生が宿泊して学生スポーツのあり方についてパネルディスカッションを行ない、翌日王子陸上競技場で初めて四大学合同の対校戦を行いました。

二〇〇二（平成一四）年七月、ジャマイカで行なわれた第九回世界ジュニア一六〇〇mリレーに出場した酒井大介君はアジアジュニア記録を樹立して、三位に入賞しました。同年、県立西宮高校出身の寺田恵さんは有力大学からの勧誘もありましたが、地元の関学に進学してきました。入学後、練習相手がいないため、高校の先生に引き続き指導をしてもらうことになりました。寺田さんは学年進捗とともに成長し、ユニバーシアードには学生時代と卒業後に入社した天満屋陸上部で第二三回、二四回連続で出場しました。第二四回ユニバーシアード・タイ大会では銀メダルを獲得しています。

二〇〇五（平成一七）年九月、現在教育学部事務室に職員として勤務しながら跳躍のコーチをしている杉本誠君の母校、香川県立観音寺第一高校からスポーツ推薦入試や指定校推薦にて毎年のように棒高跳の優秀な選手が来ていましたが、第七四回日本インカレでそれが結実して第一一回大会の前田巖先輩以来の快挙でした。山田裕司君が日本インカレ優勝者となりました。

二〇〇七（平成一九）年、次年度から人間福祉学部が開設されることになり、その中の人間科学科では中・高の体育教員の免許が取得できることになりました。新グラウンドでは体育免許を取得するのに必要な走高跳、ハードル等が授業で十分に実施できない状況でしたので、この年に全面的な改修が行なわれました。六レーンの全天候型四〇〇mブルートラックが敷設され、またラグビー部が使用するフィールドには人工芝が敷かれました。地域の中・高との連携を目的に第三種の公認競技場として申請するために必要な機具や備品を購入するための寄附を「月見ヶ丘クラブ」会員や部員の保護者をお願いし、多くの方々協力もあり必要な金額を集めることができました。また、今津にある大阪ガスのグラウンドから投擲のゲージや審判台をほとんど寄附に近いぐらいの金額で譲り受けることができました。現在、毎年二回近隣の中・高や大学を対象に西宮市陸上競技協会の協力を得て「関学記録会」を行なっています。

二〇〇八（平成二〇）年五月、第八五回関西インカレで萩田大樹君、浅野喜洋君、有明侑哉君の三名が出場した棒高跳では、萩田君が日本学生新、浅野君が関西学生新、有明君が大会新を樹立し一〇三位を独占しました。現在、関西インカレはボーナス得点制をとっているため、一種目で

五〇数点を獲得することになり、その勢いが他種目にも連動して、八度目の総合優勝を成し遂げました。同年七月、祝勝会を兼ねて創部九〇周年記念式典を関学会館で行ない、『九〇年史』を発刊しました。九月の第七七回日本インカレで荻田君が棒高跳で優勝し、翌年七月には第二五回ユニバーシアード・ベオグラード大会に出場しました。現在、荻田君は卒業後もスポーツメーカーの支援を得て、引き続き杉本コーチの指導を受けながら関学第二フィールドを練習拠点にロンドン五輪を目指しています。

井上 ありがとうございます。九〇年にもおよぶ陸上競技部の歴史にもなんども波があり、衰退期から黄金時代へのターニング・ポイントにはいずれも一人それは現役であったり、指導者であり、これらの人びとを見守り、そしてサポートして下さるOB・OGのお働きが常にあったということを実感することができました。春学期に話いただいたサッカー部もそうでしたが、そのような先輩の方々の存在があつてこそ、これだけの歴史を刻むことができるわけですね。今日の現役は明日の先輩という気持ちで、現役の皆さんにも頑張っていただけだと願っています。長時間ありがとうございます。